

# 地域交流を中心とした総合的な学習の進め方についての研究

- 交流の視点を取り入れた支援を中心に -

中原町立中原小学校 教諭 福島 隆

## 要 旨

本研究は、「総合的な学習の時間」の学習過程に地域の人々との交流を取り入れ、子ども一人一人に合った交流の視点を与え、その視点を評価活動に生かすことで、自分を見つめ直す力が育つと考え、実践を行ったものである。その結果、子どもたちは交流場面で具体的な目的意識をもって活動し、振り返りの場面においても、自己評価の中で自分自身の行動や思いを見つめ直す目安として活用することができた。

<キ - ワ - ド> 地域交流 交流の視点 自分を見つめ直す力 自己評価

## 1 主題設定の理由

「総合的な学習の時間」では、自己の生き方を考えることができるようになることがねらいの1つとされている。このねらいに迫るためにには、子どもたちに自分を見つめ直す力を育てることが必要だと考えた。

本研究では、自分自身を見つめることのできる子どもを育てるために、地域の人々との交流を取り入れ、どのような支援の在り方が効果的なのかを中心に取り組んでいきたい。地域交流を通して、子どもたちに、人の生き方や生きるすばらしさに触れさせながら、相手の考えを理解したり共感したりすることで、自分自身を見つめ直す力を身に付けてほしいと考える。そのことが、学んだことを取り入れたり、自分の生き方を考えたりすることにつながると思う。そのために、子どもの自主的な活動の過程において、一人一人に合った交流の視点を与えていきたい。行動の目安を与えれば、子どもは自分のるべきことをきちんと理解した上で活動できると思う。さらに、活動後に自分を振り返ることにもつながると考える。

こうしたことから、子どもの自主的な活動において、具体的な交流の視点を与えて地域の人々と交流すれば、子どもは主体的な活動を行い、その後、活動を正確に振り返ることで、自分自身を見つめ直す力が育つであろうと考え、本主題を設定した。

## 2 研究の目標

地域の様々な人たちとの交流学習において、児童一人一人が自分を見つめ直すことができるような支援の在り方を探る。

## 3 研究の仮説

子どもの自主的な活動の過程において、児童一人一人に合った具体的な交流の視点を与えたとき、交流の視点を取り入れた自己評価をさせたりすることで、自分を見つめ直すことができる子どもが育つであろう。

## 4 研究の内容と方法

- (1) アンケートによる児童及び保護者の交流教育に対する意識調査
- (2) 理論研究について
- (3) 授業実践による仮説の検証
- (4) 研究のまとめと今後の課題

## 5 研究の実際

### (1) 本研究における基本構想

図1は、本研究の全体構想図である。子どもの興味・関心からスタートする「総合的な学習の時間」に人とのかかわりを3回(交流の段階1, 交流の段階2, 交流の段階3)設定し、その段階ごとに、子ども一人一人に合った交流の視点を与える。また、振り返りの場面において交流の視点を取り入れた自己評価をさせる。これらの支援は、個に応じた支援とならなければならない。こうした支援をすることにより、子どもたちに自分を見つめ直す力が育つと考えた。

検証の視点としては、

具体的な交流の視点を与えることで、児童一人一人に自分を見つめ直す力を身に付けさせることができたか。

学習評価の中に交流の視点を取り入れたことが、児童一人一人の学習を振り返ることに効果的に働いたか。

の2点を考え、交流の視点そのものを検証の視点として実践化を考えた。

#### ア 交流のねらい

交流のねらいは、子どもに付けさせたい力の目安として、次の3つを考えた。

新しい知識・技能を知ることで、更に追求しようとする力付ける。

更に追求する過程で、相手に共感する力付ける。

相手と共に○○する過程で、相手の立場で考えたり行動したりする力付ける。

これらを達成するために、各交流段階においてどのような手立てを取れば良いのかを考えた。

表1 交流段階での手立て

交流段階	教師の手立てとねらい
交流段階1	自分たちが欲する知識や技能を交流相手から得ることをねらいとして考え、全体の視点「知ろう」を設定した。さらに、子どもたちの課題への追求意欲の高まりも期待している。
交流段階2	課題や計画を修正した子どもたちが、相手の人の仕事や仕事に対する思いを知ることで、人そのものに共感することを期待して、全体の視点「感じよう」を設定した。
交流段階3	段階1・2で交流した人と最後の場面でも交流したいという願いが、子どもたちに生じてくると考える。そこで、一緒に活動する中で、今までの交流のことを踏まえて、相手の立場で考えたり行動したりすることを期待して、全体の視点「共に○○しよう」を設定した。

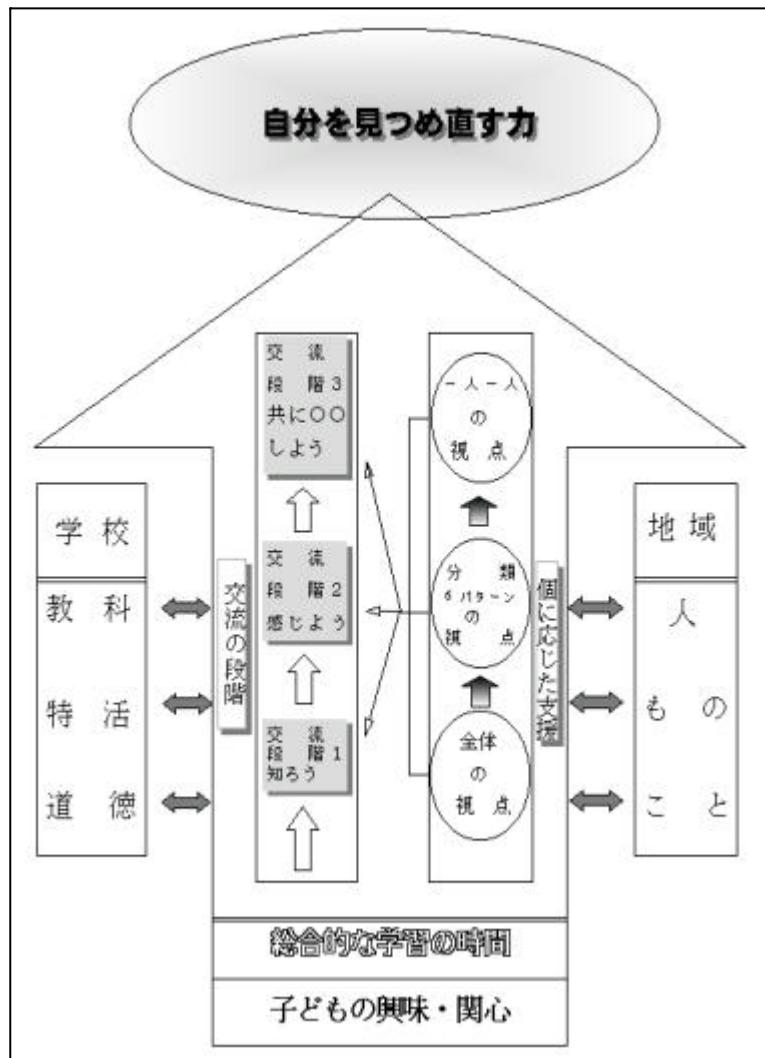


図1 研究の全体構想図

## イ 交流の視点の作成手順

ここでは、交流の視点を学級全体から子ども一人一人に与えていくための手順について説明する。交流の視点は、子ども一人一人を大切にするということを基本にして子どもたちが活動場面で主体的に活動し、自分自身を振り返る時の手助けとなるようにしたい。そのためには、子ども一人一人の能力や意識、進度等に合ったものでなくてはならない。そこで、3つのステップを設け、分類要素を基に、子どもたちそれぞれの実態を見取っていくことで、一人一人に合った視点を与えることができると思った。

そこで、ステップ1においては、段階ごとに全体の視点[知ろう、感じよう、共にしよう]を与える。次に、ステップ2として、[学習活動における興味・関心、人とかかわる力]の組合せで、表2の交流の視点分類表にある～の計6パターンに子どもたちを分類する。そして、交流する際の目安となるような視点を与えることにした。のために、子ども一人一人の実態を把握しやすくすると同時に、どのような視点を与えたらいよいのかの目安となるように、この分類表を考えた。さらに、ステップ3として、[話の聞き方、調べる力、本人による課題、教師の期待する姿]の4要素についてチェックし、子ども一人一人に合った交流の視点を検討し、個別に対話しながら、最終的には助言の形で与えていくことにする。

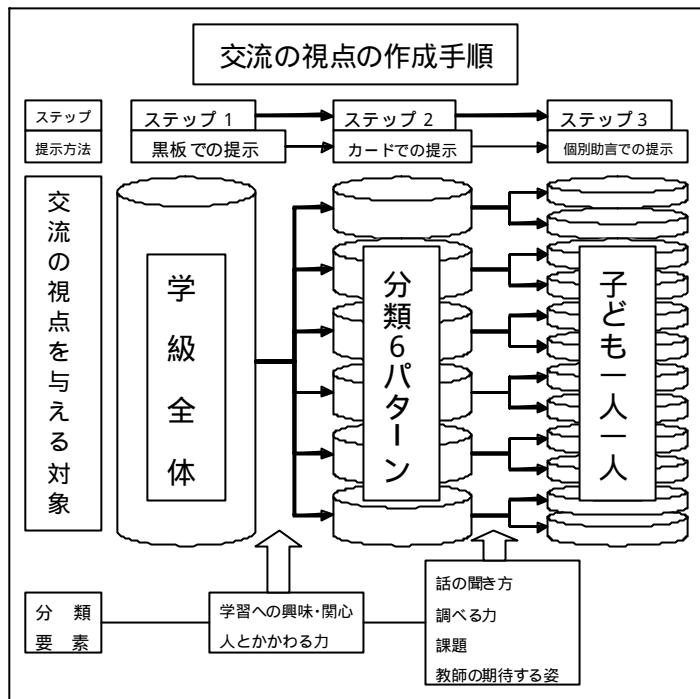


図2 交流の視点の作成手順

表2 交流の視点分類表

分類パターン	I	II	III	IV	V	VI
興味・関心 かかわる力	A A	A B	B A	B B	C A	C B
新しい知識、技能を知ろう						
新しいことで、更に違うことを知りたいとする力をつける。	相手の話を相手を見て、相手の話を聞きたいことを探して伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手の話を聞きたいことを探して伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手の話を聞きたいことを探して伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手の話を聞きたいことを探して伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手の話を聞きたいことを探して伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手の話を聞きたいことを探して伝えよう。
変更に追求する過程で、相手に共感できる力をつける。						
変更の過程で、相手の立場で、自分の立場で考えたり行動したりできる力をつける。	相手のすばらしさを知り、自分について詳しくことも話をしよう。	相手のすばらしさを知り、自分について詳しくことも話をしよう。	相手のすばらしさを見付けるため、進んで尋ねよう。	相手の話を相手を見て、相手のことを思って伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手のことを思って伝えよう。	相手の話を相手を見て、相手のことを思って伝えよう。
共に○○しよう						
相手と共に○○する過程で、相手の立場で考えたり行動したりできる力をつける。	みんなが楽しくなるようにしよう。	相手の人と楽しくなるようにしよう。	相手のことを見て、楽しくなるよう。	相手の人が楽しくなるようにしよう。	相手のこと伝えたいことをきちんとおう。	相手のこと伝えたいことをきちんとおう。

\*学習課程において、個の特性が資するこもあり得るため、交流後見量の実態を見取る必要がある。

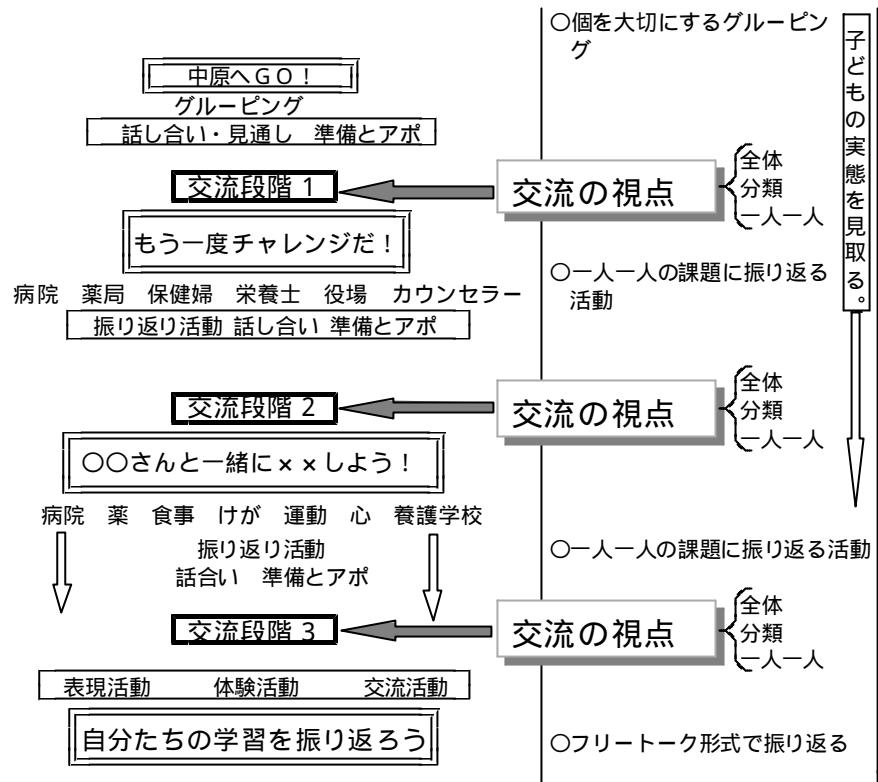
## (2) 「交流の視点が子ども一人一人に効果的に働いたか」の検証

検証の方法として、まず、それぞれの交流場面で、子どもが交流の視点を意識した行動ができたかについての検証を考えた。

次に、それぞれの学習評価の中で、交流の視点を与えたことから、子ども一人一人が、自分の行動をきちんと振り返り、それを改善し

第4学年 単元名「風の町健康探検隊」活動計画		総時数(全32時間)
子どもの意識の流れと予想される学習活動		教師の支援・交流の視点
健康ってどういうことだろう		○学級の実態から、テーマを提示。
何をしよう      何を調べよう      難しいよ		○思考が広がらない子どもには個別助言 ○見通しの立たない子どもには、個別に事例を紹介
学習の計画を立てよう ウェビングしよう		○交流の視点作成のために
病院 薬 食事 けが 運動 心 養護学校 子どもの思いや願いからの活動見通し		

ようという意識をもつたかの検証を考えた。また、クラス全体についての分析・検証は行うものの、子ども一人一人を大切にした支援方法なので、分析・検証の中心は抽出児に焦点を当てて、交流の段階ごとにまとめていくことにした。抽出児については、実際は6人の分析を行ったが、ここでは、段階ごとに大きく変容の見られた児童を抽出し、まとめることにする。各交流段階で「交流の視点を与える過程、行動・自己評価、意識の変容」について、まとめている。さらに、事前・事後の意識調査結果から見られる変容により、交流の視点の有効性を検証している。



#### ア 検証 交流段階 1

抽出児については、【子どもに合った交流の視点を与える過程の説明】【交流場面での行動と自己評価、それらについての考察】【事前・事後の意識調査結果と考察】の3点を中心にまとめている。このことは、交流段階1・2・3のそれぞれで行っている。

	学習への興味・関心	人とのかかわり	分類表	→	話の聞き方	調べる力	(課題)食べたら健康になる というものを作って、みんな に教えたい。
A児	A	A		→	A	A	
教師が期待する姿 自分の思いを積極的に相手に伝える 姿に期待する。	→			子ども一人一人への交流の視点 身体に良いデザートを教えてもらってたことを基に、自分の思い をしっかり相手に伝えよう。			

図3 A児に合った交流の視点を与える過程

知りたいという気持ちが強かった。  
だから、考えていた質問をしっかり言うことができた。  
自分の思いなどを含めた受け答えをしていた。

- 1 積極性について よくできた
- 2 交流の視点について よくできた
- 3 交流全般について よくできた
- 4 感想…視点を自分なりに頑張れたので、嬉しかった。きちんと計画を立て、実行できるようにしたい。

図4 A児の行動と自己評価

表3 A児の交流段階1の考察

A児には、交流場面において聞いたことからの発展的な会話を期待して、視点を与えた。そして、「知ろう」という全体の視点と、A児の欲求が合致したために、積極的な行動と自分の思いを相手に伝えることができた。自己評価では、全ての項目で、「よくできた」を選択している。これは、実際の行動から見ても、自分の行動を正確に振り返ることができたと考えられる。さらに、記述の中に、これから追求の意欲が表れ、段階1における交流のねらいについても達成することができている。これらのことから、A児にとって交流の視点は、実際の活動やそれを振り返る活動でも有効に働いたと考える。

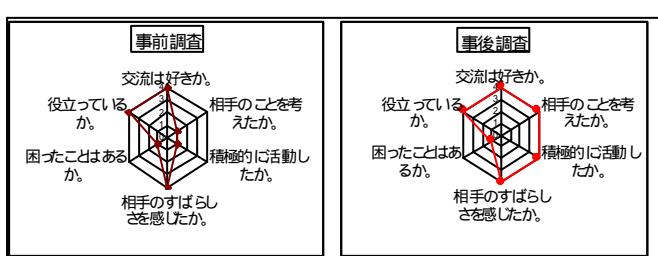


図5 A児の事前・事後意識調査結果

表4 A児の意識調査からの考察

A児は、「相手のこと」「積極性」に関する2つの項目で変容が見られる。ここでは、「積極性」に着目してみることにする。A児には、段階1で「自分の思いを相手に伝えよう」という視点を与えた。そしてA児は、このことを意識して相手と進んでかかわっていた。しかも、自己評価の中で、視点の達成感を表した記述をしていた。これらのことから、段階1の行動や思いをきっかけに、A児の意識が変容したと考える。

## イ 検証 交流の段階 2

	学習への興味・関心	人とのかかわり	分類表	→	話の聞き方	調べる力	(課題) 頭がよく働く食べ物について調べよう。
B児	C	B			B	B	
教師が期待する姿		子ども一人一人への交流の視点				○○さんのすばらしいところをしっかり調べて、先生に教えるようにしよう。	
相手のすばらしさを教師に伝えることを目標にして、頑張る姿に期待。		○○さんのすばらしいところをしっかり調べて、先生に教えるようにしよう。					

図 6 B児に合った交流の視点を与える過程

表 5 B児の交流段階 2 の考察

「仕事のこと、仕事に対する思い」を積極的に質問した。そして、仕事に対する思いの深さに驚いていた。

- 1 積極性について よくできた
- 2 交流の視点について よくできた
- 3 交流全般について だいたいできた
- 4 感想…今日は進んで話し掛けることができた。  
そして、全てを答えてくれた。最後に、朝食のことで、みんなの心配をしてくれた。

図 7 B児の行動と自己評価

B児は前回から比べると交流場面での変容が著しかった。「自分の課題」「相手の仕事」「仕事の対する思い」「相手の生活」と発展的に質問し、交流を進めていった。そうした活動の実際から、自己評価の選択も適切に行うことができている。また、交流後の聞き取りから、相手が、「自分たちの健康のことを考えてくれている」ということを感じていた。さらに、全体での振り返りで、「○○さんが栄養についてあんなに詳しいとは思っていなかつた」「仕事に誇りをもっておられた」と発言し、交流の視点が、B児にとって、段階 2 の活動の最後まで働いていたと考えることができる。

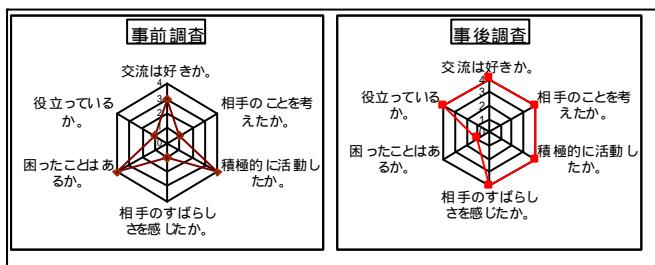


図 8 B児の事前・事後意識調査結果

表 6 B児の意識調査からの考察

B児は、「相手のこと」「相手のすばらしさ」に関して変容が見られる。段階 2 での B児への視点は「相手のすばらしさをしっかり聞いて先生に教えよう」だった。B児は、「仕事のことや仕事に対する思い」などを積極的に質問し、相手の方が「自分たちのことを考えてくれている」と思えるようになった。このことから、B児の意識の変容は、段階 2 の活動をきっかけにしたことがうかがえる。

## ウ 検証 交流段階 3

	学習への興味・関心	人とのかかわり	分類表	→	話の聞き方	調べる力	(課題) ビタミンの種類とその効果を調べよう
C児	B	B			A	B	
教師が期待する姿		子ども一人一人への交流の視点				相手の人が楽しくなるためには、自分はどうしたらよいか考えて、一緒にシチューを作ろう。	
人とのかかわりに関心をもち始めたので、相手の立場を考える姿に期待。							

図 9 C児に合った交流の視点を与える過程

表 7 C児の交流段階 3 の考察

「一生懸命すれば、相手は喜んでくれる」と言って、交流に臨んだ。相手に積極的に質問することはなかった。しかし、最後まで熱心に活動していた。

- 1 積極性について だいたいできた
- 2 交流の視点について だいたいできた
- 3 交流全般について よくできた
- 4 感想…○○さんに頼ってばかりになってしまった。でも、作りながら、ビタミンについていろいろ教えてもらいました。

図10 C児の行動と自己評価

C児は、人とのかかわりが苦手な子であった。よって、段階 1・2 では、分類は「A」であった。しかし、段階 2 の途中から、相手のことを意識するようになったので、分類が「B」に変更した。しかも、「共に○○しよう」を全体に示した時に、素早く反応し、「自分が一生懸命することで、相手は喜んでくれる」と発言した。そして、自分の思いをそのまま行動で表していた。相手との会話は少なくても、C児の相手への思いは最後まで持続したと考える。自己評価でも、適切に振り返ることができ、「頼ってばかり」という記述に、自分への厳しい目が向けられていることがうかがえる。聞き取りで、「視点は良かったけど、計画が甘かった」と答えていた。これらのことから、C児にとって、効果的な視点になったと考える。

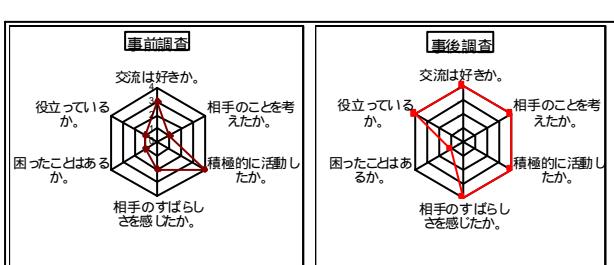


図11 C児の事前・事後意識調査結果

表 8 C児の意識調査の考察

C児は、多くの項目で変容していることが見て取れる。ここでは「相手のこと」「交流は好きか」の 2 つを中心まとめるにこする。C児は、段階 1・2 を経験し意識の変容が見られるようになった。それは、段階 3 で、「自分が一生懸命すれば相手の方も嬉しいはず」と発言したことからも推察できる。この言葉通りに C児は行動することができていた。積極的に話し掛けることはなかったが、黙々と作業をしていた。しかも、自己評価の中では、更に自分に厳しく「頼ってばかりだった」と記述していた。これらのことから、段階 3において、C児には、自分なりに「相手のことを考えて行動しよう」という意識が育ってきたと考える。

### (3) 事前・事後意識調査の結果から（事前調査…H13.10.26, 事後調査…H14.2.1 4年3組29名）

図12～14は、それぞれの交流段階にかかわりのある項目である。その中でも、「相手のすばらしさ」「相手のことを考えた行動」については、図で分かるように大きな変容を見て取れる。これは、子ども一人一人に合った交流の視点を与えたことで、子どもたちが、交流場面で、相手のことを意識した行動ができるようになったことを示していると考える。

一方、図12の「交流場面での積極性」では、交流後の落ち込みが見られる。このことについては、抽出児C児の意識の変容でも述べたが、他の児童にも個別の聞き取りを行い、「子どもが自分の行動へ厳しい見方をするようになってきた」ということが分かった。

そして、図15「交流は今後に役に立つ」の項目が伸びていることから、それぞれの交流段階後、自分の行動を振り返り、計画修正をしてきたことでの課題解決への効果や地域の人々の温かさを感じたのだと考える。

こうしたことから、一人一人に合った交流の視点は、子どもたちの行動の目安として、さらに、振り返りの目安として働いたと考える。

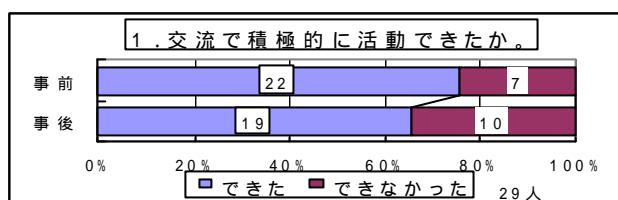


図12 交流場面での積極性

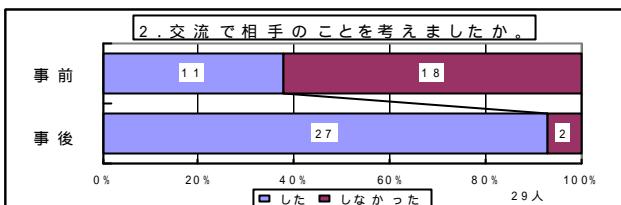


図13 相手のことを考えたか

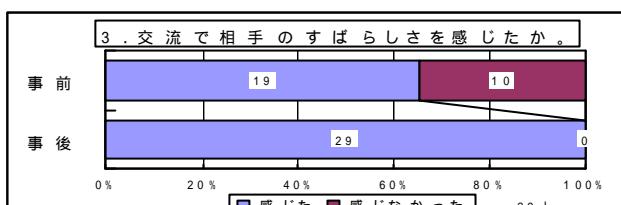


図14 相手のすばらしさについて

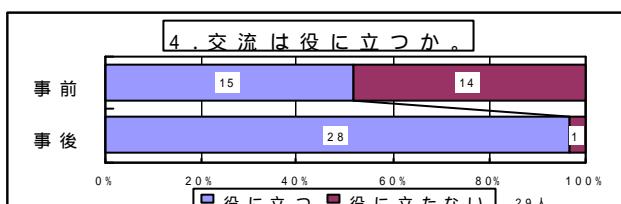


図15 交流が役に立つか

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

本研究では、自主的な学習過程の中に子どもたちに合った交流の視点を取り入れ、子ども一人一人が主体的に活動したり、自分の思いや行動を見つめ直したりできるような支援を実践してきた。子どもたちは、自分に合った交流の視点によって、交流する際に目的意識をもって活動し、振り返る際も、自分の思いや行動を見つめ直すことができた。また、自分の活動の計画修正をしたり、交流相手の立場を考えて活動したりしたことから、子どもたちに自分自身を見つめ直す力が身に付いてきたと考える。

### (2) 今後の課題

本研究では、子ども一人一人を大切にした支援を行うために、子どもたちの実態を把握し、交流の視点分類表を作成して研究を進めてきた。その結果、多くの子どもたちには、交流の視点によって、力を付けたと考えられるが、中には、交流の視点を活用できず、力を伸ばせなかった子どもたちも見られた。

そのことを踏まえ、子ども一人一人の力を高めるために、交流の視点の内容や作成の方法等について、今後、更に研究を進めていきたい。

## 《参考文献》

- ・ 児島邦宏 『豊かな体験で生き生き教育・総合的学習へのアプローチ』 1999年 ぎょうせい
- ・ 有田和正 『子供とつくる総合学習』 2000年 明治図書



